

FD・SDセミナーにて学んだこと

首都大学東京管理部国際センター事務局留学生支援係

関口 尚子

「こちらの事情も理解して欲しい・・・」セミナー当日の朝、予定のバスに乗り遅れそうで気が焦る中、私は担当する留学生事業について、教員の方から電話で問い合わせを受けていた。予算や運用上の問題といった制約の中、可能な限り留学生の希望に沿うよう検討を重ねたある支援案であったが、少々厳しい意見をぶつけられ、私は心の中でそう呟いていた。

大学で働き始めて2ヵ月、私は教員と職員の「協働」の難しさを感じ始めていた。よく耳にする「教職員協働」という言葉。漠然とその必要性を理解しつつも、教育研究を重視する「教員」と、組織運営に配慮せねばならない「職員」が互いに協力し合う関係というのが、正直ピンと来なかった。

研修会場に向かうバスの中、私はずっと今朝の電話のことを考えていた。どうすれば理解してもらえるのだろうか。頭の中は担当業務のことで一杯、研修どころでは無かったが、雨の中30分程バスに揺られ、八王子セミナー・ハウスに到着する頃には心の焦りも多少落ち着いていた。少しずつ業務の幅が広がると同時に職務へのプレッシャーを感じ始めていたこの時期に、同じような思いを抱えているであろう他の新人職員と共に、職場を離れて自分が置かれた環境を見つめ直す機会を持てたことは、今考えるととても良いタイミングだったと思う。

私がこの研修で学んだものは2つあった。

研修は講演と演習の2部構成。学内外の講師陣による講演はどれも面白く、興味深く拝聴した。特に初日の東京大学名誉教授・天野先生による「公立大学が目指すもの」と題された講話は、日々与えられた業務をこなすことに精一杯で、視野が狭まりがちであった自分の状況を気づかせてくれるものであった。講演は「自分の大学を知る」重要性の指摘から始まった。首都大学東京が目指す方向性を見出すには、大学を形成するこれまでの歴史と現在の立ち位置を知ることから始める必要がある。そして「誰のための大学であるか」を明確にすることが重要であり、その答えは「学生」であると、天野先生は明言された。大学が第一に学生のためにあること、これは至極当然に聞こえる。けれ

ども、教育・研究を通して学生と密に接する教員と違い、学生を（少々乱暴な言い方をすれば）管理する側にある職員にとって、忘れがちな事実である。私はここに「教職員協働」の実現にとって必要不可欠な共通認識があるように感じた。

私にとってこの研修で得られた成果1である。

そして、もうひとつは2日目研修最後の講演で内藤前総務部長が語られた言葉にあった。内藤部長は組織で働く上で重要な心掛けについて語られた。私が印象深く聞いたのは2点。「ごめんなさいを言える心」と、「あてにされる人になれ」という言葉だ。日頃からそう努めているつもりではあったが、職務に誠実で「あてにされる人」であるよう業務にあたりたいと改めて思った。

1泊2日の研修プログラムには、上に触れた以外にも興味深い講演が多かった。学生教育における課題（履修や成績評価における問題、教室不足など）を議論の焦点とする幾つかの講話は、学生サポートを主とする自分の職務とは異なるフィールドの議論であった。しかし、日常業務では知り得ない教育現場が抱える問題点について理解を深める良い機会であった。2日目の新入職員によるグループ討議では各々が抱える課題や悩みに共感し、または、自分の職場との差異に驚き、新人同士の率直な意見交換を通じて大学組織の全体像を垣間見る貴重な時間となった。

FD・SDセミナーから数か月が経過した今、後期からの留学生受入事業で日々忙しく過ごしている。そんな中、ある先生よりメールを頂いた。受け入れる外国人留学生が無事来日した事についての内容であるが、その中に「おかげ様で」「今後もよろしく」という言葉があった。大学がまず「学生のためにある」ということ、「あてにされる」よう努めること、この2つを意識し職務と向き合った結果、先生らと同じ方向を見て、少しでも仕事が出来たような気がして嬉しい。再認識する機会となったFD・SDセミナーに感謝したい。また、最後になるが、今回の研修実施に関わった関係部署の方々に、お礼を申しあげたい。